35

# 天応穴について

宮川　浩也
北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部客員研究員

## はじめに

腧穴の中で，穴位も無く穴名も無いのものを阿是穴といい，別名を天応穴という．その説の初出と考えられのが，李梴の『医学入門』（1576 刊）で，「散針者，治雑病而散用某穴，因病之所宜而針之，初不拘于流注也．若夫折傷跌撲，損逆走痛，因其病之所在而針之，雖穴亦罔顧其得與否也．指痛針痛，徐氏謂之天應穴」とあり，天応穴は，「徐氏」が唱えていたことをいう．そこで，「徐氏」とは誰のことか，検討してみた．

## 二，『刺鍼要致』

御園意斎（1557～1616）の弟子の沢庵宗彭（1573～1645）が書いた『刺鍼要致』（1619 成）には，「又不拘経穴，刺病之所在，謂之散鍼，徐氏又謂之天応穴，今時刺者多是散鍼之一法而已」とある．『医学入門』の記載を参考にしたものと思われ，徐氏の天応穴鍼法が，わが国に将来されていたと考えられる．

## 三，『鍼学発朦訓』

宮脇仲策著の『鍼学発朦訓』（1714 自序）の「鍼術ノ元由」に，「田代氏三帰回翁ト云ル人アリ，大明ニ入テ徐氏ガ伝ヲ得タリ，聞説，此人南宋徐熙字秋夫カ後裔，世〃胥嗣テ名医ナリ，専鍼術ヲ善ス，扁鵲華陀カ伝ヲ得，十二経穴ニ拘ラズ，腹背ヲ刺ス，効験神ノ如シ，最省約ニシテ簡要ナル者ナリ」とある．「南宋徐熙字秋夫」とあるのは，一般に「徐氏八世」といわれ，始祖が徐熙であり，秋夫はその子である．よって，「南宋」は南朝の劉宋を指す．宮脇流は，「当流鍼伝道統」に，徐氏から田代三喜（1465～1544），三喜から助心，助心から宮脇海月，海月から宮脇仲策へと伝わったとある．

## 四，まとめ

以上のことをつなげると，田代三喜が留学期間（1487～1498）に南朝宋の徐熙，徐秋夫の末裔に学び，日本に将来したのが経穴に拘泥しない鍼法ということになる．その鍼法は少なくとも明代まで行われており，ある程度，名が通っていた鍼法であったと想われる．馬玄台の『霊枢註証発微』（1586 刊）の経筋篇には「其所取之兪穴，則痛処是也，俗云，天応穴者，是也」とあるので，あるいは，傍流の鍼法として認識されていたのかも知れない．いずれにしても，李梴が言う「徐氏」とは，徐熙，徐秋夫の末裔を指すと考えられる．